共同体・社会主義のための覚え書2

尾関　弘

共同体社会主義

―④一種の流行のように〈共同体〉が、概念規定のないまま様々のイメージが文がかれている。〈共同体〉は人間の生活集団の一つであるから、人の生活のあらゆる方法にわたって総合的に検討されなければならない。その方法として、私は〈共同体社会主義〉というパターンを用いようと思う。しかしそれはまだ概念すら確立していないものである。

⑤ここで云う社会主義とは「新しい社会の建設を意味する」、「社会主義社会は、個人の自由な結合からなるところの、自主的に経営し、相互に公式に交換を行う共同体の連合である」というランダウアーの考えにそっておこう。とすると、共同体社会主義とは、国家および資本主義経済からの否定と離脱のなかから、社会主義社会、共同体の連合体を建設することを目的とするものである。

国家及び権力の本質

―⑥あらゆる社会主義思想は、表現のちがいはあれ、究極において国家の破壊を目的としている。それは国家が権力の最高の表現形態として、人間生活の悪の元凶としてある。

ウェーバーによると「国家とはある特定の領域の内部において、それ自身のために合法的な物的強制力の独占を強制するところの人間共同体である」（『国家社会学』）。レーニンによると「国家は階級支配の機関であり、一つの階級による他の階級の抑圧機関であり、階級の衝突を緩和しつつ、この抑圧を合法化し、強固なものにする〈秩序〉を創出するものである」（『国家と革命』）と云っている。奇しくもレーニンは、国家を抑圧機関であるとしながら、それを利用することによって、〈抑圧の合法化〉新たな〈強固な秩序〉の創出、すなわち〈プロ独国家〉という〈反動的国家〉の出現を予想しているのである。レーニンにとって国家は抑圧の〈機関〉である点に注目されたい。機関であるかぎり、使用者によって、それはいろいろな目的に使用することが可能である。それは国家の本質を言いあてはいない。この点の比較だけでは、人間共同体（Gesellschaft）としたウェーバーの認識の方がより本質的である。

⑦バクーニンにとっての国家は神の否定と軌を一にしている。「国家は権威である。それは暴力である。それは暴力の衒気（けんき）であり、自負である。」「国家とは、人民の真の自由と安寧とが、政治的教祭のために生贄に捧げられる祭壇です。国家は常に、なんらかの特権階級の世襲財産でした。司祭階級の、貴族階級の、ブルジョア階級の――そして最後に官僚階級の世襲財産だったのです」（『神と国家』）。マルクス主義者は、国家を〈道具〉として考え、使う者によって良いことに使われたり悪いことに使われたりするものである。そのため国家にも良い国家（プロ独国家）と、悪い国家（ブルジョア国家）があるのである。しかし、バクーニンには〈良い国家〉などなかった。国家はすべて破壊されねばならない対象でしかなかった。

備北夏季キャンプ日記より

（つづく）

8月15日　何か知らんけど阿呆な事ばっかり云うて、一つも仕事らしい仕事をしなかった。しかし穴堀はかなり苦痛を供う孤独な作業だったな。主体的に堀り進める意志に、肉体が追従して来ないのだからね。でも矢張スコップを置いて水にのどを潤し一本の煙草を喫う時には何んとも云えぬ生の充実感があったな。せめて完全な穴を堀ってから云りたかった。

8月22日　昼頃まで雨。大そうじをする。汚れた着物のせんたく。たなも一日がかりでつける。又、待望の旗もできた。黒と赤の⊗マーク。何の意味かなあ?2・3時頃には雨もあがり、畑仕事。美濃早生及び大蔵大根の種子をまく。又、耕運機用の道路も作った。今日、四名参加。

8月23日　四人下山。人が去るというのは、とても淋しいものです。早朝ワークは一枚のシーツから三つのゲストンカバーを作ること。昼から、白菜の小さな芽を助けるため、大きな草をぬき、唯一の農業「　」をかけました。うねを6～7つ作りあげたころ夕食。

8月28日　今日の仕事は下の畑の入口作りの残りをワタクシ一人でかたずけたのと、他の人たちはタキギ集めです。北原さんは一人で朝から晩まで耕運機で下の畑をタガヤシてあられました。デス。午後からは今井さんを中心に裏の果の不の下に牧草の種をまいてはりました。晩メシは、トマトとナスとソーセージとキャベツがはいったカレーです。